

土田杏村の文明批評について

藤本正久

一、文明批評の立場

土田杏村（明治二九―昭和九）、本名茂^{つとむ}は、大正より昭和初期に活躍した在野の哲学者、文明批評家である。彼は東京高等師範（博物学部）に在学中、田中王堂の影響を受け、文化哲学への関心を強くもつようになった。大正三年、京都帝国大学哲学科に入學、西田幾多郎に師事し、大正七年卒業する。杏村が論陣をはって活躍した時期は、わが国においてマルキシズムの流行期で、思想界ばかりでなく文学、芸術の分野においてもその影響が強く、たとえば文学界ではプロレタリア文学の興隆があり、それに対してブルジョア文学のモダニズム文学が出現した。また、アメリカ的生活様式や風潮が流入し、当時の社会的現象として各方面に現われた。これがいわゆるアメリカニズムで、「都會主義」として

は、ダンス、ジャズ、カフェーなどとして象徴され、「機械主義」としては、キネマ、トオキイ、自動車などとして現われる。そこに〈大衆〉と〈機械〉という今日に通ずるところの現代文明の特徴がすでに把握されているのである。この機械文明による生活様式の技術化・画一化は、人間性の喪失・個性の平均化をもたらし、都會主義は利那的享樂的時代風潮を生み出し、当時の日本に、文化の爛熟と社会の頹廢をもたらした。

日露戦争以降、わが国の経済的成長率は、当時の国際的水準から見れば可成り高く、それにもなつて、農村人口の都市への流出が顕著となつた。⁽¹⁾このような日本経済の条件を基盤として、大正文化、大正デモクラシーは成立したが、他方、貧富の差は拡大し、都市と農村の対比は顕著となり、労働問題、社会問題がかまびすしくなつた。当時、自由主義思想家は文化主義、教養主義、

人格主義などを唱えたが、他方マルキシズムと対決せざるをえなくなり、西田哲学や田辺哲学にもその影響は見られる。

この時代において、杏村も大正文化人として、文化現象全般にわたっての研究を行ない、その文化哲学を基盤として、マルキシズムの批判をし、さらにカント主義とマルキシズムとの統一を企図し、ナトルプの理想主義的社会主義を説いた。また、マルクスの経済理論に代わる新理論を、グダラスの信用経済学説に求めたのである。杏村は、このような思想を基盤として、「文明批評の見地において一切の評論」を行なったのである。「文明批評を企てんとする者は、彼自らの哲学を有つてゐるのでなければならぬ。

だが、単なる哲学者は文明批評家たり得るものではない。とりわけ文明批評家は哲学的識見のほか、諸文化科学もしくは諸社会科学の方面における総合的・普遍的理解をもつ人でなければならぬ。加ふるに、彼は現実の社会の諸事象を深く洞察し、するどく批判し得る人たると共に、社会的実践に対する熱意と積極的生活態度とに生きる人たることを要するであらう」と恒藤恭が述べているように、杏村独自の存在意義は、この文明批評の面にあると思われる。

杏村自身も、「京都に住んで⁽³⁾」という随筆において、「私は依然として一個の文明批評家である。それ以外に私の任とするところのものはない。」と、はっきり彼の本来の在り方を表明している。さらに、「文明批評家である以外の処に、私は自らを位置せしめ

たくない。私が経済学の研究者として名乗る時には、その意味は経済生活に於ける文明批評家として名乗つたのである。」といひ、その場合、杏村自身に肝要なことは、「その中に現われる私の文明批評の見地である。私を見るにはその文明批評の見地に於いてして欲しいのである。」と強調していることに、杏村本来の究極的立場を知ることができる。これを恒藤が、「この思想的生涯の出発点において杏村は既に文明批評家を以て世に立つことを意図し、終生斯かる抱負を持ちつづけた」と述べる所以であらう。

二、文明の高等批評

右のように、杏村は文明批評を志したことは明らかであるが、その文明批評とは何であるのか。これについて、杏村は「文明の高等批評」という論文を『文明思潮と新哲学』（大正三年）という処女出版物の巻頭に載せている。そこで、杏村は当時行なわれた従来の評論について、「文明の高等批評をなすものは極めて少く、大多数はただ通俗的の取扱ひをなす解説に過ぎない」と評して、「評論」と「解説」とを峻別するのである。

そして、「評論そのものが一の行為である如く、行為そのものは又一の評論である。」と、「評論」は直ちに「行為」と断定する。その「行為の方法は討議であり、その目的は生活様式の徹底である。」と、彼の「評論」の内部構造を明示するのである。このような見解に立てば、「哲学の通俗解説は自然科学の通俗解説の如

くに実行に有為なる動力を与へることはない」という評価となる。「何となれば自然科学は生活材料の利用であるけれども、哲学は生活価値の判別であるからである。生活材料の利用に於いては知識で十分だが、生活価値の判別には評論が必要である。」⁽⁵⁾

このような意見について、峰島旭雄氏は、「杏村は、へ生きる」ということ、しかもいわゆる物質的な生活のうちにはさへも、ただ生きるのではなくて、価値判断的に生きることがひそんでいてとしたのである。」と解説し、さらに、「人は生きる以上、価値判断的に生きるものであり、そのことにおいて思想をもって生きるのである。生存の根本事実としての思想は、まさにそのことにおいて価値関係なのである。」⁽⁶⁾と論じているが、まさに杏村の「高等批評」の本質を指摘したものいえよう。実際、杏村のこのような批評の態度は、彼の全著作において貫ぬかれていっているといつてもよからう。

しからば、「批評の効用」は何であるのか。杏村によれば、「行為の選択に関して本来批評は発生したものである。……(中略)……批評は発生の起源から見ても、その対象は全く個性そのものであるべき筈である。」そこで批評は「この個性の批評によって生活様式の徹底を為すこと以外」にはないということになり、さらに、「我々は自らの個性を批評すると同時に、自我の表現個性の産物をも批評する」こととなる。杏村は「文明」を「個性の外部流動」と規定し、ここに「批評」は「文明の批評」となる。

杏村は、外的な文明批評をまた、「低級」と「高級」の二種の方法に分類し、「個性の外部流動を単に外部から接触する方法と、その外部流動を常に内部原因の個性にまで還元して同情する方法」とする。ただし、前者は外在批判、後者は内在批判ともいえる。彼のいう「文明の高等批評」は後者の立場をとるものとされる。

このような「文明の高等批評」の実例として、『文明は何処へ行く』⁽⁷⁾(昭和五年、千倉書房刊)の著作を中心として考察する。しかし、その前に杏村の文明批評の立場について、その論述をもう一步進んで見ておきたい。杏村は、当時の社会の諸事象をまずモダノロジエ風に描写しながら、「現代の文明の中心は一体何であるか。この文明は何を要求しつつ、将来更にいかなる新しい様相を展開するものであるか」という現代文明問題の根本的考察を試み、その解決策を導びこうとしたといえよう。

杏村は、現代社会が、「生活の統一を要求」しているという前提に立ち、その理由として、文明的現象が複雑多岐に分化し、内容が豊かになり、生活の諸事象がそれぞれ独立した意義をもって展開していることを指摘する。この分化した諸領域に対して、一つの統一的な場を構成することを目指すのである。その主要なテーマとして、機械、芸術、社会経済生活、イデオロギー及び社会改造論などを挙げ、これらが「全体的にいかに統一せらるべきであるか」という考察をするのである。その論述は、極めて平易な

理解され易い表現でなされている。ここにおいて「私の念願は最も深い水準にある問題を最も平易な言葉の水準で一般大衆と共に検討し合ふことにある」と杏村の本来の主張が具体的に示されるのである。

三、現代日本文明論の展開

『文明は何処へ行く』という著作は、今日より五〇年以前（昭和五）のものであるにも拘わらず、現代文明の本質を殆んど洞察していたと思われる。その意味で、杏村の予見の鋭さと、諸事象の本質の把握力、総合的統一力の豊かさには驚異を抱かされる。

杏村は、まず現代社会のモダノロジー的描述をし、当時の都会と田舎の生活様式を対比して、その矛盾撞着を指摘し、その原因を追求する。田舎（農村）、工場、都会（商人）における諸産業の区別をし、それぞれ生活資源の生産、加工生産、商品（生産物）の流通の役割を分業とする⁽¹⁰⁾とともに、田舎も都市化する徴候を示すものとして「ラチオのポオル」が田舎家にも見られることを例にとる。杏村は、「トオキイとテレヴィジョンの発明が進められて、我々はどんな場所にあるても、世界のどんな場所でも起る出来事を、そのありのままの姿、ありのままの音で見且つ聞くことが出来るであらう。」⁽¹¹⁾その時には、「都会と田舎の生活に凡そ何の区別が立てられるか。」と今日の様相がはっきりと予想されているのである。

彼は、農村が収入が少く、都市の商業が多額の利益を得ている矛盾を指摘し、「田舎が都会生活へ同等に参与することを希求するやうになった時、我々の文明はいかなる姿を取るであらうか。現代文明は今のままに存続するか、或は全く滅亡するか、それとも何等か違った姿のものに変化するのであるか。」と来るべき将来の問題を予見して、提起している。その田舎家の「ラチオのポオル」を一つ取上げて、そこに文明の将来への警告の「シグナル」とみ、「田舎は都会に対して最後に叛逆を宣戦した。」と洞察したのである。さらに、都会における「日常生活の矛盾」、例えば、都会の住宅の狭小、粗末と会社、公共建築物の近代化との対比、豊富の中における給料取りの貧困など示し、また、現代文明の尖端として、「キネマ」、「ラチオ」、「トオキイ」、「カッフェー」、「ジャズ」、「円タク」など、いわゆる文化的とか、現代的とかよばれるものを挙げる。

右のようなものを、当時「先端的」とよんだが、そこで杏村は、では「何が尖端か」と問うのである。「尖端」とは、今日の社会の代表的事象のいわれであるが、杏村の定義によれば、「第一に一つだけ存在するのでは意味をなさないし、またその一つだけのものでは尖端の意味をなさない。」尖端といわれるからには、いくつもの「新奇」が併列して存在するものでなければならぬ。「第二に、尖端となるものはそれ自身、何等かの体系を持つてゐる。しかもその体系は、必ず我々の実生活の何れかの部分をその

中に織り込んでゐる。」と述べられる。その一例として、彼はマルキシズムを挙げ、それは理論的には社会の尖端ではあり得ないが、現実的には尖端思想となつてゐるというのである。

では、杏村はマルキシズムをどのように見ていたか。「マルキシズムは、無産労働者の现实生活に於ける不満と緊密に結びついてゐる。」「この現実的な体験を織り込んだ全体の体系が現に流行してゐるマルキシズムの正体なのだ。」というように捉え、その理論的内容はそこでは問題にならないと見てゐるのである。杏村は、マルキシズムという名で呼ばれる一つの左翼的社会思想を現実の事象として見る。「マルキシズムを信奉するものは、その弁証法的唯物論だの労働価値説だの内容を理論的に詳しくは知らないが、ただこの思想は無産労働者の生活を基礎とし、現代社会制度をその無産労働者を本位として改造する思想だだけ知つてゐる。」⁽¹⁷⁾と述べられるのである。杏村はマルキシズムを、理論的に肯定しないばかりでなく、社会改造の戦術としても否定してゐるが、それが事実として流行してゐるマルキシズムが存在してゐることをも否定しようとはしないのである。かようにして、尖端とよばれる他の思想や流行も、マルキシズムの例と同一の性質をもつものとされるのである。

さらに、大衆社会の問題として、当時、社会の蠶蠶^{かんかん}をかつた「モダン・ガアル」⁽¹⁸⁾の例を挙げて、それに関して「羞恥心」の問題を論ずる。「羞恥心が低下したのは、社会生活の中に無数の生

活体系が交錯して、現代はこれをいかに統一すべきかの方針を持たず、将来の文明の形態に関して確定せられた予想を持たない事実を背景とするものだ。」と「生活体系の不統一」にその原因を觀取し、さらに「現代のすべての破廉恥の行為が、それぞれに容認せらるべき理由、その根拠となるべき生活体系を持つが故に破廉恥の行為でなくなるといつてゐるのではない。破廉恥の行為をなしつつその行為者が案外これを破廉恥と感じなくなつてゐるのは、現代生活の一樣相だ。」⁽¹⁹⁾とし、さらに政治家の収賄の例を挙げて、現代人は、昔の人の感じなかつた、ある新しい心理を持つことになると述べてゐる。

「我々はこの交錯する生活体系に対して」⁽²⁰⁾の批判を持ち、生活態度を決定しなければならぬと、杏村は主張する。すなわち、価値体系の多様化から、各体系間の矛盾が起こり、そこに葛藤が生じ、不安が発生するのである。杏村のこの批評は、今日「価値の多様化」が問題になつてゐることと通じものである。見方によつては杏村の時代からの問題でもあるといえよう。あるいはデモクラシーは、このような価値体系の多様化をもたらすということになるのではなからうか。

四、現代文明を決定するもの

杏村は、社会における諸生活体系の間における、相互争闘を觀取し、その間に「より強く決定的の地位を保持するもの」とそうで

ないものとの区別がある⁽²¹⁾という。その例として流行を取り上げる。当時の女性の髪型(耳隠し)、バラソルの形などともにマルキシズムも挙げられる。「今マルキシズムが社会の中に流行してゐるなどは、丁度この状態に於いてあるのだ。」⁽²²⁾

彼はこのような立場から「社会性の特徴」を指摘する。第一に、「現代生活を決定する有力な要素」として、「社会経済の生活体系」が挙げられる。これはまず、「すべてが社会的に決定」され、次に「すべてが経済的に決定」され、最後に「すべてが産業主義的に決定」されることを意味する。これは都市化乃至近代化が進められて、そうなってきたのである。そこに「社会」が意識化され、さらに「社会経済」という言葉で、現代社会における「経済」性が、重要な位置を占めることを表わす。杏村は、日本における工業の発展を家内生産より工場生産へ、すなわちマニファクチュアより工場制工業への進展を説明をして、これを「産業主義」と名づける。この産業主義をとる社会経済の立場に立った経済学をマルクス経済学と規定し、その功績を杏村は評価する。ここでは「いかなる生産品も、商品として」⁽²⁴⁾市場で取扱われる。

第二の特色として、「機械」が挙げられる。⁽²⁵⁾近代産業主義が機械によって可能となり、すべての生活を「革命化」したと説明される。例として、飛行機、飛行船、映画、タクシイ、ラジオなどが挙げられる。それはさらに、交通、通信、芸術に至るまで大きな革命的影響を与えたという。すなわちこのような事態を杏村は

「産業革命」の大正期日本版として見ているようである。

杏村は次のように言っている。「新機械が発明せられる毎に、我々の社会生活には、人間相互の關係に就いて大いなる変革が起る。時には社会に革命にも等しい重大な変革が起る。」「社会人は、この社会の新しい關係と新しい性質の世界とに對して、新規蒔き直しの態度を取らなければならぬ。」その結果、「生活を絶えず新らしく改造して行くことを機械文明は我々に要求するので」⁽²⁶⁾今日では、さらにテレビ、コンピュータなどから人工衛星、原子力発電などにより、いかに社会生活が変化したことか。しかし、その事情は、杏村の論議におけるのと本質的には変わっていないと思われる。それはさらに、「社会の人間關係を變へる」⁽²⁷⁾生活環境を變えるのである。杏村は、ここにおいて現代社会の特色である大衆と機械という二大要素を認識しているのは卓見である。しかし、今日のエネルギー、資源、人口、公害などの諸問題などは未だ意識化されていないので、現在から見ればいささか楽天的であるようにも思われる。

杏村は、現代文明の動向に對しての価値批判をなし、態度決定をするための根本原則を明示する。すなわち、「現代文明問題考察の順序」⁽²⁸⁾として、文明批評の方法を定立する。第一に、ある文明の動向を肯定するか、否定するか。第二に、無数の生活体系の中で最終の決定要素を見究める。第三に、これら生活体系について、どれが我々の生活を全般的に自由にさせるか、或はどれが我

私の生活要求を最も豊かに満たしてくれるか。以上の規準をもって現代社会の文明を評価する。

ここで、杏村は「我々は或る時には、次代の幸福のために自己の幸福を犠牲にしなければならぬであろう。」というところまでの倫理的に高次の段階に到達する。「批判の立場は常に、高い社会的立場でなければならぬ。自分だけが生活内容の上で幸福であるのは、まことに幸福である所以ではない。社会人のすべてが、より高く、またより大きく幸福でなければならぬ。……(中略)……かようにして人類すべてを自由にし、人類のすべての要求を満たすこと」を主張する。⁽²⁹⁾ここに我々は功利主義を想起させられる以上に、一種の宗教的祈願をも感じさせられるのである。「かくして現代の文明問題を解決する我々の根本方針は決定した。」と杏村はいう。そして、いわば「最高価値」とでもいえるものを決定する規準を求めて、「最後に行動の選択に於いて、我々は神を憧憬れるところの人間でなければならぬ。私はこの方針に随って、現代の文明問題を聰明に解決する道を読者と共に検討して行きたい。」とその心情を吐露するのである。

五、現代社会における機械の意義

我々の生活は、社会と機械による制約を受けているものとして、杏村は機械による功罪を指摘する。まず機械のもたらした害悪として、第一に、元來機械を使う人間が機械に使われるようになって

た主客顛倒を指摘する。これはウイナーの『人間機械論』を予想せしめる。⁽³⁰⁾杏村は産業革命の性格を説明して、労働者が直接的に機械の影響下におかれるばかりでなく、一般の人々に對しても、一見、生活の近代化が行なわれ、その行動範囲が拡張されたように見えるが、実はそれは我々の生活が産業社会体制に組み込まれたのだというのである。労働者は、このような生産過程において、人間性を疎外される。すなわち分業によって、完成の喜びを奪われ、人間は部品化、齒車化され、さらに一般人の生活環境すら機械化される。⁽³¹⁾

第二に、そこに人間の個性が喪失される。これを、杏村は「個性の略奪」⁽³²⁾と呼ぶ。日用品から住宅まで、我々の環境はすべて機械の生産した画一的な均一的なものによって占められる。さらに杏村は、工場の騒音、悪臭なども挙げているのは公害問題のはしりを観取していたとも思われる。第三に、環境の機械化、人工化による自然からの断絶を指摘し、自然物に代って、食品の着色剤、防腐剤の使用の有害性を憂慮する。

しかし、このような「機械文明を否定できるか」⁽³³⁾と杏村は問いかける。彼は、機械による我々の生活への侵害は認めるものの、機械文明を固定しないで流動的なものと見るのである。「例へば紡績機械の発明の如きは、物理学的知識の適用の上から見れば、大したものではない。」「それにも拘らず社会生活の上には、紡績機械の発明は全く革命的变化を与へる。」⁽³⁴⁾というように、単な

る科学的知識としてよりも、それがテクノロジとして働くとき、どのような力を持つかということの認識は透徹しているといえよう。

そこで杏村は、機械の害悪への対策として二つの考え方を提示する。第一に、「機械をその本性に随はしめて絶えず進歩せしめるか。」第二に、「機械の進み方に何等かの調節を加へるためこの進みに停頓を加へる方策を講ずるかだ。」この第二の方策には、ロ「マクラブの「無限な成長の哲学」の否定や、デュボスの定常状態⁽³⁶⁾の主唱にも通じる考え方であると思われる。

次に、杏村は機械による労役の減少を指摘する。これは、ベルトコンベア・システムからオートメーション・システムへという現在の産業体制のままです労働の減少方向へと進むことを見事に予見しているもので、その結果レジャー時代の出現が可能になってきた。さらに、彼は人間の本性である「好奇心⁽³⁷⁾」の問題を取り上げ、それは「絶えず新しい機械の発明せられることを希求してゐるものとすれば、今後の文明に於ける機械の発達を我々はいかにしても否定するわけにはいかない。」それゆえ、「機械の無限の進歩は、人間性を害するものになる、だから我々は機械を否定して昔の自然に還らなければならぬ」と主張する考えは拒けられる。とすると、我々は機械の発達にどのように対処しようというのか。杏村は、このような所謂「機械文明の上に人間性の優越を示す」文明的態度を建設しようというのである。

彼は、むしろ「機械は人間性の進歩的な特色⁽³⁸⁾」の表現ではないかという問を提出する。すなわち「機械自身が一つの魂を持つ⁽³⁹⁾」という表現をする。そこに機械が独立した存在となり、それ自身の体系をもち、他の存在に働きかけるものとなることを杏村は見ている。例として汽船を挙げ、そこに機械の美を感じるのであるという。では、何が機械を美と感じさせるのか。「無駄の多い美は、実はまことの美となっているといへないのだ。」⁽⁴⁰⁾それは全体の統一を害する。「美しいものは整然たる統一」を持たなければならぬと、彼は美の規準を示すのである。これは近代的美の感覺ともいえよう。そしてこれは実用的なものと一致するという方向をとる。「美的なものは本質的なものであり、生命的に統一せられたものでなければならぬが、我々の生活を限りなく実用的にするとは、直ちに生命的に統一せられたものとなることであつた。美と実用とは生命の中心において渾然たる一つのものに帰したのだ。」と説かれる。杏村は美と実用の一致を説くことによつて、そこに近代美の觀念の根拠を求め、これはアート・クラフトの理論ともなり得る実用主義的見解に立つものであるう。

かくして杏村は「機械が芸術の世界へ参加する⁽⁴¹⁾」と宣言する。彼は、機械として、汽船、自動車、飛行機さらに建築を総括して、そこに「時代の生活様式の最尖端」を見るところか、「機械こそ最も芸術的なもの」と考える。このような風潮をモダニズムとして、ここでは「構成」という概念が最も重要な意味をもつこと

になり、「最も実用的なものが最も芸術的なもの」になり、「美的なものとは、その構成に於いて美的なもの」と展開される。

杏村は、実用に新しい意味を付与する。「実用」とは「個人主義的の実用ではなくて、社会的実用なのだ。」⁽⁴³⁾これによって行き詰った表現主義を見直し、その内面性に換えるに社会性を充當することにより、新芸術に「構成の確実な方針」を与えることを考える。しかし彼のいう「実用」とは、マルキシズムの階級の実用でもなく、「その人の生活を生命の根柢から利益すること」である。そこで表現主義が生命の内面性を生長させるものであるならば、その「内面性と実用とは共通の見地」⁽⁴⁴⁾を得ることになり、「新しい構成主義が、我々の生活の実用を考へた時のその実用と、この内面性とは同一の規準の上に立つ」のである。

そこで、構成は実用という目的を得て、「全体の形を整理したもの」が最も「構成的な」ものになり、それ以外のものは「裝飾的」なものとして排せられるのである。そこで、たとえば新しい芸術が生まれたとしても、「これを産む動力、これを産む要求のすべては、ただ生活自身によって生活的に意識せられてゐる。」⁽⁴⁵⁾新しい「質」を生むものは、「ただ生活自身」なのだということになり、「かくして、我々が新しい機械を生産」⁽⁴⁵⁾したということになる。

「機械は現代の社会生活の総合せられた機能を表現するもの」と考えられ、その機械を観察・研究して、「そこに我々自身の生活

や機能や要求や圧力を反省すること」が求められる。なんとならば、「機械は本来いささかの無駄をも許さず、不経済な方向に進むことを許さない。機械はただ合理的でなければならぬ。」と、ここでは杏村は全く完全な機械讚美を唱っているのである。これは機械崇拜ともいふべき思想であつて、今日のような機械発達の段階に至れば事情が異ってくるが、当時としては、そこまでの事態は予測されなかつたのは止むを得なかつたかも知れない。⁽⁴⁶⁾かくて機械のもつ合理性と社会性が指摘される。機械を生活の必要に使用することは個人的なものであるが、更に機械を使用することによって、個人的必要を「社会生活の中へ参与せしめる」⁽⁴⁷⁾ことになる。すなわち、機械は社会的活動なくしては考えられない。「一つの社会生活が、この工場の機械を運転する」が、しかし「機械は一人の必要を適切に満たすようには製作せられてゐない。」⁽⁴⁸⁾そこで機械は一の「標準」を示し、我々は社会的「標準」的な存在としての機械を把握するのである。

杏村は、実用主義をさらに、「中世的」と「近代的」に、また、「個人的」と「社会的」とに分類し、茶道、民芸を例に挙げて批評する。彼は機械の存在が否定し難いことを考察したとき、反つて機械に「積極的の生活意義」⁽⁴⁸⁾を見出そうとした。「生活がその機能を本質的に生長せしめるとは、生活が実用的となつたことを意味し、また生活がかく実用的となることは、生活を精神的ならしめる所以である。」⁽⁴⁹⁾その精神的であるとは、物質的のものを棄

却することではなく、我々の生活の要求が、「本質的に生かされて行く」ということである。昔の茶道や茶室が精神的であつた如く、現在は機械を精神的なものと見るといふのである。茶道や茶室は「中世的であり、個人主義的要素から解放」されることのできなかつたが、「機械は全く現代にふさわしく社会的である」と観取する。このように、杏村は人間生活を一つの体系と見て、人間生活の変化に於じて茶室から機械に発展するようなものと考えるのである。

六、社会問題とその解決策

以上のように、杏村は現代の機械は「現代の生活事情」を顧慮しての合理的存在と見、機械そのものについての社会性を考え、逆に社会についても機械との関連において考えるのである。そして、このような見地に立つて、文明の様相の変化について考察する。その一例として「円タク」⁽⁵⁰⁾が挙げられる。それはまた「商業主義」の表われでもある。円タクの「円均一」を以て、「均一化の理想」とするが、これは当時の均一化の普及の例であり、その他、円本の流行もあつた。杏村は、円タクは自動車の高級性を一般化し、プロレタリアもブルジョアも、一時的には「一円の値打の人間」として「同一の社会的地位」に立たしめると考える。この円タク批評は今日では全く事情が變つたが、そこに「均一」、「平均化」の意義を見ようというのはい一つの着想である。もっとも今日

では、オーナー・ドライバーが普及し、それが円タクの事情とつて代つたと見ることもできよう。杏村によれば、この「均一」が社会を征服する力を持つとし、そこに社会生活自身に「平均化」といふ一つの大きな理想が考えられる。

これが普遍化されたのが、所謂「商品」であり、商品が真に商品の意義を有つようになったのは「商業主義の時代」⁽⁵¹⁾になつてからである。しかし商品が商品になつたとき、商品はそれ自身において矛盾の性格を表わす。これを、杏村は「商品の焦燥意識」⁽⁵²⁾と名付ける。「商品が平均化すること」は、商品の性質が一個所に固定していることであるが、その間に社会生活は「昨日から今日へ、今日から明日へと」変化する。そこで商品は一面で保守的でありながら、他面では「極端に社会に対して尖鋭化しようとする」もので、これは機械の場合と同じである。しかし、「一の社会を征服した商品」は、その社会における「平均化」の任務を最もよく果したものである。社会において勝利するものは、尖鋭的なものでも卓越したものでもなく、平均、一般、平凡であると杏村はいう。その例として、娯楽大衆雑誌、映画俳優などが挙げられ、これらは、「あつてもなくてもよい、という存在物なのだ。併しその平凡性が、社会を征服し得る所以である」⁽⁵³⁾。と実によく大衆社会の性格を把握している。

次にジャーナリズムを挙げ、それは一見、尖鋭的と見られるが、実はそうではない。「それは一般社会によつて、尖鋭的と考へら

れて居ればそれでよい。⁽⁵⁴⁾」のである。なぜならば、「その思想が真に社会生活に対して尖鋭的であるかどうかの論理性が問題ではなく、「ただ社会に「平均的にかく認められてゐるといふ商品性が問題なのであるから」である。杏村は、マルキシズムはその例であるとして、それは論理的には十九世紀思想であり、現代社会に對してはもはや尖鋭的でなくなつてゐるのに、ジャーナリズムの商業主義によつて有力に支持せられ、社会的に「流行品」となつてゐる。「それが抽象的であり、概念的であることは、却つてこの思想の商品性を有力ならしめる所以のものである。」と評する。このように杏村は、一般的に知識人から排撃されるべき平均性、商品性を理想的価値として措定するところに、その特異性が見られるところである。この商品性は機械の「標準性」と類似している。これを杏村は、「我々に確保せられた機械の客観性、社会性を、標準性と呼ぶ⁽⁵⁵⁾」と定義する。そして「平均性」は現代道徳の指導概念にもなつてゐる。曰く、安全第一。能率増進。産業合理化。と。

しかし機械の標準性と商品の平均性とは、よく類似しているが、根本的性質は全く違つてゐるのであるという。「機械は標準的であるが、やはり卓越的である⁽⁵⁶⁾」といつて、杏村は機械に独自性を与えるが、これは機械も商品の一つであるとの反論もあるところであろう。しかし彼は機械と商品の区別をするが、またその類似性を問題とする。「それは機械も商品も現代社会生活を媒介とし

て、互に全く無関係のものではなく⁽⁵⁷⁾」濃密な関係があることを指摘する。そこで機械は尖端に立ち、商品は平均を目標にするというが、機械は商品となるし、商品は尖端を目標そうとする面もあるといえよう。

とにかく杏村が「現代社会」が商業主義によつて強く決定せられてゐることを主張することは正しい。「商業主義の支配を受けた何ものも、商品性の規定を受け⁽⁵⁸⁾」、個々の個性を脱却して、すべて均一化、平凡化する。商品や機械のみならず、人間ですらも均一化する。「かうした社会に典型的の商品性として威力を揮ふものは貨幣である。」として社会経済論を展開する。この貨幣を基盤として、商品経済から信用経済への移行を説明し、商業主義は資本がすべてを支配するが故に、資本主義となる所以を述べる。杏村は、そこにマルクスの『資本論』の意義を認めるのである。

さらに信用経済における信用手形の性格を分析し、銀行の役割を中心に置く。そのような状況から、マルクス経済学の修正の必要を唱え、資本主義社会は、すでに信用主義社会へと進展したと説くのである。かくして商品の社会的決定権は信用へと移行していると述べられる。「資本はすべてを統一すると同時に、自分自身をも統一化する傾向を持つのである。」⁽⁵⁹⁾」そこで「信用がすべてを支配するやうになつて」来たので、それは我々の文明を画一化する傾向が極端に進められると評されるのである。

右のような問題がその矛盾を露呈している例が都市化として表

われていることを杏村は指摘し、その解決策を提案するのである。彼は農村における文化の受容と形成を説き、都市の解体を唱え、都会の経済的集中を解消し、地方へ分散する方向を主張する。これは全く、「地方の時代」を唱える今日における社会的要求と同様である。その解決すべき主要問題は、やはり経済関係にあり、ダグラスの経済理論に立脚して、都市の農村からの収奪を解消する方策である。そのためには、(1)消費組合と(2)農民銀行の設立を必要とする。これは今日、農業協同組合として、ある程度は実現された。またその論拠としては、社会主義または社会政策の方向が考えられている。すなわち「銀行の信用発行権を社会の手に収めるより外はない」という言葉に明示されている。さらに同様の方法を工場にも適用しようという。

このような農業銀行、労働者銀行は、全国的に有機的な連絡を保ちながら、しかもそれぞれ「独立性」をもって「官僚的に全国が一つに統一せられる」こともない組織とする。このようにして、文明の集中化を排し、「文明は地方化するけれども、全体のかたい連絡を失はない。」ようにすることを杏村は唱える。

以上のことが出来るならば、過激な暴力も革命も必要とせず、「商業主義を克服する手段は、また実に商業主義そのものに外ならぬ」と平和的、漸進主義の改造を提案される。杏村はこのような方法も「機械的な方法」と考えるのである。

(一) 竹村民郎著『大正文化』五一六頁(講談社現代新書)。

- (2) 『土田杏村全集』第十五卷(全十五卷、第一書房)、附録三〇―一頁。
- (3) 同 五九頁。
- (4) 『全集』第八卷、小引。
- (5) 同 一五―七頁。
- (6) 降島旭雄「比較思想の歴史」(『比較思想のすすめ』ミネルヴァ書房 所収) 二四―五頁。
- (7) 『全集』第八卷、所収。
- (8) 同 一一九頁。
- (9) 同 一一―二頁。
- (10) これらはそれぞれ、いわゆる第一次産業、第二次産業、第三次産業にあたる。
- (11) 『全集』第八卷、二二八頁。
- (12) 同 二九頁。
- (13) 同 一三四頁。
- (14) 同 一三五―八頁。
- (15) 同 一三九頁。
- (16) 同 一三九―四一頁。
- (17) 同 一四二頁。
- (18) 同 一四五頁。
- (19) 同 一四八頁。
- (20) 同 一五三頁。
- (21) 同 一五五頁。
- (22) 同 一五七頁。
- (23) 同 一五七―六一頁。
- (24) 同 一六二頁。
- (25) 同 一六三―七頁。
- (26) 同 一六九頁。

- (27) 同 一七〇頁。
 (28) 同 一七七—七八頁。
 (29) 同 一八八—一九頁。
 (30) N・ウィーナー、池原止戈夫訳『人間機械論』(みすず書房)。
 (31) 『全集』第八卷、一九一—一九頁。
 (32) 同 二〇〇頁。
 (33) 同 二〇三頁。
 (34) 同 二〇四頁。
 (35) 同 二〇五頁。
 (36) R・デューボス、野島徳吉・遠藤三喜子共訳『目覚める理性』(紀伊国屋書店) VI—VII頁。
 (37) 『全集』第八卷、二二二—二三頁。
 (38) 同 二二四頁。
 (39) 同 二二五頁。
 (40) 同 二二九頁。
 (41) 同 二三二頁。
 (42) 同 二三五頁。
 (43) 同 二三九頁。
 (44) 同 二四〇頁。
 (45) 同 二四四頁。
 (46) N・ウィーナー、鎮目恭夫訳『科学と神』(みすず書房) 参照。
 (47) 『全集』第八卷、二五二頁。
 (48) 同 二七七頁。
 (49) 同 二七八頁。
 (50) 同 二八一—九頁。
 (51) 同 二九〇頁。
 (52) 同 二九二頁。
 (53) 同 二九五頁。

- (54) 同 二九七頁。
 (55) 同 三〇三頁。
 (56) 同 三〇五頁。
 (57) 同 同所。
 (58) 同 三一五頁。
 (59) 同 三三八頁。
 (60) 同 三六〇頁。
 (61) 同 三六五頁。
 (おじもと・まさひさ、哲学・科学論、東海大学教授)